

# “きび”考

---

2012年（平成24年） 第7号 12月発行

日本先史古代研究会

# “きび考” 2012(平成 24)年 第 7 号 目 次

○古代アジアを論証する (2/2) 24 年度総会基調講演より	矢吹壽年……………2
○美作(後南朝と菅家)探訪記	山崎泰二……………8
○気になる神社あれこれ	井上秀男 ………14
○連載 四国八十八ヶ所 巡り 「歩き(ウオーク)遍路の旅」 5	樋口俊介……………18
○古代吉備を探る(1)	吉備槌太郎………22 (本松一郎)
○葦嶽山(日本ピラミッド)登山記	濱手英之……………26
○キリギス共和国と日本	丸谷憲二……………28
○編集後記	編 者……………30

## 日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

この宣言は 2011(平成 23)年 4 月 19 日の定期総会にて規約と共に、修正の上正式決定

# 古代アジアを論証する(2)

エジプト3000年の繁栄の事実は個人が知識を独占せず広く皆に教え彼等もそれをよく学習し続けたのです。

平成24年度定期総会記念講演(2)

会員 矢吹壽年

**(一)講演に先立って=自己紹介を兼ねて私と歴史の関わりを話します**

**(二)戦前戦後の歴史観**

**(三)朝鮮半島との歴史観**

**(四)オリエントと風水思想**

**(五)中国大陸との歴史観**

**(六)西アジアの文化が中国西北部に伝わった根拠**

上記は“きび考”6号に掲載しました。その続を以下に掲載します。

**(七)日本の縄文中期から弥生初期の頃の中国**

5500～5000年以前は寒冷・乾燥化の時期で、喰いつめた新モンゴロイドの南下とチベット族(戦車を伝えた)の進入で母系から父系へ転換(強い男が価値を得た)した時代、黄河流域で防御性の高い城堡が出現します。(騎馬民族と戦車が用いられる)これは新モンゴロイド(トルコ系モンゴル族ツングス族)の南下による影響及びタリム盆地からチベット高原に進出してきた印欧語族(アーリア)の遊牧部族によって押し出されて黄河流域に脱出せざるを得なかったチベット族の影響と考えられます。

黄河中、下流域の龍山文化(4800～4000年)にはモンゴル族の影響が、満州の辺で起きた紅山文化(5400～4300年前)にはツングース族の影響が伺われ、黄河上流の馬家窯文化(～4700年前)長江上流域の三星堆文化(5000～3000年)にはチベット族の影響が考えられています。こうして一方では父系転換と私有制度

が強まり他方では戦争圧力が強まる中、いわゆる中原地域において紀元前21～16世紀の夏・殷・周(周は前1100～前56年)王朝が誕生し、中国私権文明の歴史が幕を明けます。初期中国文明は西方チベット族と北方モンゴル族を巡る覇権争いの時代でした。

夏王朝をチベット族とする説と長江流域から北上した南蛮とする説がありますが、チベット族は先に長江流域に進出しており、制覇力となる武力(青銅器の武器・戦車)と言える点からもチベット族とみなして良いでしょう。米を食う民族は武力で他民族を制覇しないのであります。殷については(3050年頃)夏に従属していたモンゴル族とする説と西域からやってきたトルコ族とする説があります。楼蘭(ろうらん)の遺跡からヨーロッパ系白人の特徴を示すミイラが見られ、殷が青銅器の文化を持った事からトルコ族でも可能。殷が夏(か)の体制をそのまま引き継いでおり、殷で起った漢字の独自性や天信仰から見てモンゴル族による政権と考えて良いでしょう。

3100年前になる殷に服属していた周族(トルコorチベット族)と羌族(きょうぞく)(チベット族)が協力してモンゴル系の殷王朝を滅ぼし、周を建国します。「山海経」(4～5000年前の地誌)には5帝が周辺各地を治め、その子孫が辺境の民族であると記しています。殷は羌族を生贄にしたといわれるが、初期中国文化は西方のチベット族と北方モンゴル族の中原を巡る覇権争いでした。

続く春秋時代(2770～2221年頃)には弱肉強食の秦による中国統一に至る江南(呉・越)の現地民の逃走による難民が(倭族=倭人=タミル語を話していた)朝鮮(新羅)(加那)や日本(幡多氏)へ多数漂着してくるが、その後秦王朝(2200年前)の専制政治にあって日本へ計画的に脱出して来た徐福一派は男女3000人が30隻の大船団で最先端の軍備と職工と穀物の種

を携えて朝鮮や日本各地に渡来して来たとき、この計画的な移民が日本の弥生文化に与えた影響は大きいと思います。彼等は原中国人と東胡族系モンゴロイドの混血とします。(或は大伯氏=邑久氏 呉・越から着た人々)

また長江の最上流からインドへ脱出することも可能な環境がある。よく日本語とタミル語の親近性が議論されるがインド南部に脱出した倭人勢力かも知れないと言う説がある。(この説の人は東南アジアのインド市場を知らない) ここで中国人が周囲の外国人を蔑視して東夷・南蛮・西戎(じゅう)・北狄=匈奴と呼んだがイザナギに蛭子が生まれている。文化が低く中国人が蔑視するような物でも尊んで親しむ奴(民)か、倭人は自認していたのか。

#### (八)日本語の故郷と伝来の足跡

かつて日本語はウラルアルタイ語族として一括され日本、中国東北部(満州)、韓国等と同じ範囲で括られていましたが、戦後に安田徳太郎氏のレプチャー語起源説が出版され大反響を巻き起こしましたが、これに金田一の東学派の大反対で沈没、以後反対した金田一派は新説、正統説を発表していないため朝鮮語こそ日本語の始めと多数の韓国人の自称学者が発表しましたが定説のないままに現在に至っています。

言語の考古学といった部門は、東大も京大も説は出していないのでありましょか。言語考古は戦後放置されていました。最近新聞広告で東大の大野晋(すすむ)氏の「日本語の教室」を手に入れ、日本語はどこから来たのか」について大野氏は学習院大学で「江実(こうみのる)」先生に日本語の系統の講義を受けて居られていて、先生はアルタイ語の優れた研究者として知られ蒙古源流の翻訳等もなされていたが「蒙古語からは日本語と対応する単語は出ない」と言うことでした。江先生の云われるには南インドの「ドラ

ビウイダ語族は文法の構造が大体日本語と似ている、要注意だ。と研究を進められたのがきっかけでした。ドラビウイダ語の辞書を求めて共通点の多いことに興奮したと書いています。

**ドラビウイダ族はインダス文明を開いた民族でしたが、紀元前2000年頃馬と馬車、戦車でインドに侵入征服した高貴な人=アーリア人(バラモン族)と称して、インドの支配者階級になり、タミルは南インド・スリランカに移動した。南インドのバラモン族が商売をなりわいとし、カンボジアへ移動したと考えられている。**

それからインド大使館と連絡をつけタミル語を話す人を紹介してもらい研究が始まったのですが、話を続けるうちに「タミル(南インドの一族)にはヒンズー教より古い祭りがある。1月15日にする祭りで赤い米を炊いてそのお粥を食べると言う。大野氏の家では1月15日に小豆粥を食べる習慣があった。「砂糖を入れて食べるのですか?」と問うと「砂糖か黒糖を一緒に」と言うので驚いた。1980年から9ヶ月間新説を「言語」誌へ連載したところ、NHKから現地に行つて調査をしないかと誘われ1月15日の行事を再現してくれる条件で行くことにしたそうです。

現地の村長婦人の炊き上げたお粥を皿に盛つて梯子で屋根の上に登り「コウコウ」と鳥を呼んで、その粥を供えるのです。同行した九州大学の松原孝俊氏が「アツ!カラス勧請(かんじょう)だ」と叫びました。帰国して柳田國男の「歳時風俗語集」を見ると日本の1月15日の小正月の行事が詳しく書いてありました。後につぎつぎと判ったのですが、南インドの1月15日の「ポンガル」の行事と日本の小正月の行事には15項目にわたる共通項目があるのでした。例えば日本では各地でトンドという1月14日に正月かざりや書き物を焼く行事があります。南インドでも1月14日の晩に古いものを焼きます。青森県では1月15日に「ホンカホンカ」と唱えて糠(ぬか)を蒔いて家を廻る行事があると云う。南インドでは「pongalo pongalo」と唱えて、家を廻る練り歩

く等です。ホンガの古形は日本語でポンガですし、菅江真澄の「すわのうみ」の天明4年(1784)の記事によると、長野県諏訪では1月15日の夜「ホンダラホ」と言って廻るとあります。これで大野さんは確信を得たようです。

日本語の研究は賀茂真淵(1697-1769)等の国学で始められた伝統のから、国学で行おうとするやり方がありますが、国語研究は法語学研究で行わないと国際的評価は得られません。かつてウラルアルタイで行われていた、研究との摺り合わせも必要ではないでしょうか。古代韓国、朝鮮語とのアルタミル語との共通点も、両国で調べれば面白い結果が出ると思えます。大野氏はこの本の中でインド南端のタミルと日本との7000キロあり、南インドから日本への伝来は陸路と海路が考えられる。陸路は途中に高い山もあり、どの道を通っても途中には別々の言葉を話す様々な民族が住む、これを経て来たたとすると途中の民族の言語が混ざる筈であろう。それはタミル語の原形を変えて殆んど同一と決めるような、音韻の対応を不明確なものにしたであろう。と言うことは海路を考えなければならない。古代の航海術は陸地から4キロ以内の線をなぞって廻れば比較的安全に航海出来たようです。気をつけなければならないのは浅い浜や岩床と海賊です。

元航海士として世界一周を3回経験した岩田明さんが居ます。岩田さんは中東のシュメールと東南アジアとの関係に注目しておられ、ルーブル博物館に保管されている粘土板に楔形文字で刻まれた帆船一隻の製造のための材料表(使用材や木釘等の数表)を手に入れ翻訳し、その表の材料で南インドのケララ州のインド洋に面したヘイポールの造船会社に、表にある材料全部を使った帆船を作る依頼をした。出来上がった船は全長15メートル2枚の帆を張ったものでした。さすがにこの絵がないので解りませんが、後のジャンク船のようなものと想像できます。

**南インドのタミル人(貿易をするバラモン族)の移住が  
東南アジアのアンコール・ワットやアンコール・トムの遺**

**跡を残します。上記の吉村作治氏の著書もあります。  
最近九州にも同じ系統と見られる50年程前に確認された薩摩塔と言う石塔が発表されています。伽那では  
まだ報告されていませんが、可能性は有りと考えていま  
す。**

自らキャプテンとして乗り込み7人のスタッフと共にこれを操って1992年3月17日南インドを出発、スリランカを経てシンガポールに至り北上して台湾のキールンに寄り、沖縄の久米島沖で6月17日突然の三角波によって転覆するまで、航海できたといえます。麗沢大学服部英二教授に伺った話によりますと、マレー半島の中央の狭い部分にはベンガル湾側と南シナ海がわにそれぞれ港があったと言います。この二つの港の間を結ぶ20キロメートルあまりの山道があり、これを象に荷物を負わせ運んだ。そこに居たインド人はタミル人だったということです。もう一つ、七五調に近い調子がタミル語に存在するといえます。

朝鮮語とタミル語との間にも100語あまりの単語の対応が明らかになって来ました。加えてタミル語をインド北西隣のカンナダ語も朝鮮語との間に凡そ同じくらいの対応語を持つ事が分かって来ました。例えば日本語の fata(畑)とタミル語の paiukar(米作地)と対応すると見えますが朝鮮語にも Pat(畑)があります。日本語の Kuro(畦)とタミル語の Kurompu(畦)は対応しますが朝鮮語にも Kur.ang(畦)があります。米の生産のための土地の設備の名称が三国間で共通したということで、タミル-朝鮮-日本と言う三国の間で共通だと云うことで、タミル-朝鮮-日本と云う三者の米生産に何らかの関係があることを示唆しています。

これについては①のルート=タミル→朝鮮→日本 ②のルート=タミル→日本が考えられます。②とすると南シナ海から台湾まで来ると対馬海流に乗るわけで、対馬海流によって対馬海峡まで北上したら、右に折れれば北九州、左に取れば朝鮮半島南部となります。南インドから南シナ海を北上して来た船が南朝鮮、北九州とに同じ文明をもたらし

たとえ云う考えは、強く作者の関心を引きました。金田一京助氏の支持も得ました。大野氏は言語学者で歴史的な面は素人なわけでありませぬ。台湾も謎が多く、或いは鍵が隠されているかもしれません。

私は先ず2年前に韓国の伽耶(かや)を2度目に訪問し伽耶山に登り高霊伽耶の伝王宮跡から磚(せん)を見つけました。瓦磚を捨得して国立博物館へ持参して来ましたが、その後、金海(きめ)に廻り金海伽耶王陵を観光しました。初代金官伽耶国王金首露王の妃はインドの「阿愉陁(あゆたや)国」の公主許氏を娶る。その経緯は詳細にはしませんが、墓という物が残り拝観できます。回覧している写真集にありますのでご覧下さい。純粋なタミル語が入っているのではありませんが、王妃が公主であれば当然侍女数人も同居しますからどうでしょうか、色々考えられます。

#### (八)南インドからの東南アジアの古代交易

現在岡山市立オリエント美術館で吉村作治氏の古代七つの文明展が開催されておりますが、この吉村氏の書いた「東南アジアのアンコール・ポロブドール」に紀元1~2世紀頃扶南(ふなん)林邑(チャンパ)と呼ばれる国があり、ここにインドの商人が定着しインドと中国の商いを行っていたとあり、金官伽耶国の金首露王の即位は西暦2年頃であるから扶南のインド人が王妃になったとしても現実味がある。そしてタミル人がこの地の支配の娘と結婚するなどして、この地の支配者となる者も出てきたことは想像に難しくない。また古くからインド人のコロニーがかなり存在したことは間違いない。彼等はカーストの最高位バラモンであったが商業活動に従事して、扶南の支配者はインド系であったが、林邑の方は漢族の地方官僚の子孫の区連と言うものが反乱を起こして建国したが、後に王統は何回も替わっている。

中国の殷王朝は商と呼ばれたと云うほど、商業活動を活発にしていたことが伺えるし、周も同様にインドと交易している。BC273年インドのマウルヤ

朝の王となった、アショーカ王は仏教に入信し、仏教の素晴らしいことを広く世界に広宣流布した。僧の木村日記が書いた「アショーカ王とインド思想」に依れば紀元前BC265年に仏教伝道師をシリア、エジプト、マケドニア等に送り布教を行ったとある。これは石柱に刻まれた巖面刻文にあったと云う。推考すればこれらの国とは交易も行っていたであろうし、インドの船(軍船と考えられる)で派遣したであろう事も判る。

東南アジアの王朝は「東西貿易」すなわちインドからもたらされる商品は地元の香木、香料、樟脳などの産品とローマ、ペルシャの商品を中国の王朝に売り捌いて中国の磁器や薬品。染料、絹製品宝石の売買で利益を上げ、政権維持の費用の一部をまかなったことであろう。農民から取り上げた税のみでは鉄製の武器材料などの費用としては到底足りない筈である。また周辺にはかなり広大な水田稲作地帯を有していたに違いない。それによって膨大な人口と兵員が確保でき、王国としての独立性を保てたと考えられる。海上輸送は恐らく海軍にも似た兵員(船乗り)の護衛(戦闘力)が海賊対策として必要であったに違いない。近代イギリス海軍は海賊がその発祥だと云われている。古代の商船はどこでも武装商船であり、操船用の水夫だけでなく兵隊も乗っていたことは十分考えられる。時には自分達が海賊に早変わりしたこともあったであろう。娘を伽耶の王妃にすれば鉄の導入も容易で有利であったろう。現代の支店の様な店舗等も作ったのかもしれない。(倭寇だって同じと考えるべきではないか)

「南齊書」扶南伝によれば扶南は「為船八九丈広裁六七尺」と云うようなかなり大型の船を持っていた。9丈なら21.6m幅7尺なら1.61mと云う長細い手漕ぎの船だったようです。勿論外洋で使用する船はもっと幅広く、風向きによっては帆も使える形になっていたでしょう。これは扶南の港チャオとバンドンとの湾内連絡には十分な大きさであります。

台湾は四世紀まで中国の歴史に地名が出てこな

いとされています。次に六世紀(540年ごろ)流求と記録されます。6・7世紀では「瑠求」以降使用する字は変わるが、15世紀に明の時代、小瑠求と称して沖縄を含んでいました。16世紀に「台湾」と明記され沖縄が「瑠求」と記されています。このいきさつは不明です。北部の良港基隆を古くは鷄籠としているから、朝鮮神話(鷄林)とも関係があったのではないだろうかと考えます。

### (九)ルートの考察

南インドからベンガル湾を東へ渡るとマレー半島に当る。古代はマレー半島の西側から陸路を東岸まで運び、そこから扶南や中国の寧波(ニンポー)まで運び、右に取ると北九州で北を目指すと朝鮮に至る。マラッカ海峡を通る航路は技術的に進歩を見た。もう少し後か造船技術の進歩が必要かも知れない。ただしマレーシア東岸を陸で運んだ辺りにはタミル人達の村があったと云う。陸路を横断するのに最短一週間程かかるが、同じ年の季節風(この場合南西風)で一挙に中国まで行けた可能性があり、インドシナ半島扶南(フナン)林邑(チャンパー)辺りまでは確実に行けたと思われます。面白いのは支石墓(南方系)のルートと重なることであります。

別の情報によると中国の宋時代(10世紀)頃になるが、インドからマラッカ海峡を南下してスマトラ南部のパレンバンやジャンヒに行き、その辺りに中国から来た商品(主に陶磁器)を仕入れインドに帰って行くと云う方法があった。この時期の特徴は中国商人が自ら仕立てたジャンク(中国式大型帆船)で陶磁器等の積荷と共に東南アジアに出向いて来たことである。それは南宋の時代になって中国商人の海外渡航が市舶司制度によって公認されるような機構が出来た事が大きく影響している。

ジャンク船=「ジャンクメール」のジャンクである。ボロ、中古、不良品のジャンクである。このジャンク船の船首付近の船底にガターボートと呼ばれる垂直板がついている。これは横風の際に船が風下に

流されるのを防ぐ役目がある。また船尾に舵がない大型船になればなるほど舵も大型になる。舵はその上に伸びたまっすぐな棒を回転させることで舵が左右に切れる。しかし舵は方向を転換するだけでなく、横波やうねりを乗り越えたりすると舵に大きな力がかかる。したがって舵の棒を支えるのに堅固な装置が必要となる。しかし木造船の場合は、構造材に強度の関係からある程度から大きいものは作れなかった。

又舵は船底からかなり突き出さないとその役目をしない船本来の目的は「輸送」である。輸送のためには船に積み下ろしが必要となる。岸壁に接触すれば良いわけではあるが、近代まで港湾設備は貧弱であった。特に南海の島々にはさんご礁で囲まれている。さんご礁の内側は満潮時でも2m程しかないから、舵が邪魔でさんご礁の内に入れない。

大体サンゴ礁から波打ち際まで、500mから2kmもある。座礁の恐れもある、そこで船の両脇に取り付けて、サンゴ礁の内側では引き上げて本船が波打ち際に近づけるようにし、帆を降ろして櫂の代わりに使ったらしい。西洋の船より実用的であったと言われている。ジャンクは西洋人の悪口とも言われるが速度、運搬量とも当時一流であって、西洋人の東洋蔑視のアダ名であった。

ここで遊牧民が便利に使った火打ち石について、御存知でなかったら関東の青少年の家で行う使用方法についてお話してみたい。鋼鉄片の火打鎌(杵とも)に硬い石を打ち合わせて出る火花を火口(ほくち)に点火する「花火式発火法」に用いる石と鋼。古くは燧石(ひうちいし)とも表記、英語名のflintという語はライター用の合成石で異なります。材質としては玉髓、チャート、石英、ジャスパー、サヌカイト、黒曜石、ホルンフェルス等の硬石を用いています。(全部新・旧石器の材料であったと指摘できます)

日本における火打石は「古事記」に倭建尊が叔母の倭姫から授かった袋に入った火打道具を用いて難を逃れた話が知られ、又養老律令軍防令において兵士50人ごとに火鑿具(ひきりぐ)と熟艾(やいくさ)一斤(モグサ・ガマの穂等で作った火口)の携帯を義務付けていました。常陸国風土記には同国が火打石の産地であったことが記されています。

久慈川の支流で採掘された白い玉髓製の火打石は江戸にも出荷され「水戸火打ち」と呼ばれました。硬く減りにくく最高級品でした。蓬(よもぎ)を五月頃に刈り取り陰干して完全に乾燥させ、新聞紙等を敷き上で手で揉むと葉緑素の部分が粉となって落ちる。残るのが艾(もぐさ)で、これを蒸し焼きにすると火口の完成です。木を薄く剥いだへぎの片端に硫黄を煖(あたた)めて、付けると付け木が出来ます。火口に切火を打ち、火口に火がついたら軽く吹き火を大きくします。これに付け木をあてて軽く吹くと燃えつくのです。硫黄は漢方薬屋で手に入れることが出来ます。日本の特産物でもありました。

これが遊牧民の知恵で、これが無いと夜に火がなくて食事ができないのです。肉なら目の前に沢山いるのです。彼等は全天候の中で生きていかなくてはならないのです。雨でも雪でも霧でもどこでも火が得られる、彼等にとってこれが文化だったのです。「火口」さえ湿っていなければ、乾燥した時に木をこすって得る火より数倍便利なのでした。



亀首峰かも知れぬ 亀頭である(陽石)



亀旨峰丘の支石墓

妃の伝記によると南伝仏教かも知れない。石塔風である。



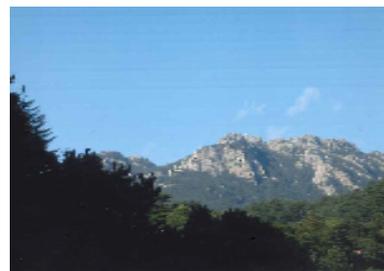
亀旨峰の立石



妃陵 後方の円丘は王陵



南方型の支石墓で上面に 亀旨峰石と浅く彫る。伽那族も南方渡来系かも知れない。



高霊伽耶国の伽耶山遠望

この麓に伽那山城、古墳群、王宮跡、寺院がセットになって存在する。

# 美作(後南朝と菅家)探訪記

会員 山崎泰二

## (一) 身近な繋がり

私が進めているエコちゃん(生ごみを堆肥化にする手作り装置)仲間、一回り先輩の田中夫妻宅に、全国紙「歴史探究 10月号」に掲載された私の拙文を渡辺先輩のも含めて、お二人に届けに上がった。このお二人は原尾島界限の、自宅での家庭菜園を勤しみながら、老人会のお世話等地域活動にも余念がなく、私の歴史系の話を心地よく聴いていただけるそんな気さくな仲間である。田中宅に上がり奥さんの茶菓のもてなしの会話の中で、意外な方向に発展した。古稀を迎えた私もこの夫妻の前では若造の仲間ではあるが、知的な会話は何時もお互いに得るものがあるようで歓待していただいている。

田中氏が部屋の隅で何か資料を探している。氏が奥さんの実家へ初めて挨拶に伺った折に、今は亡きお父様から聴いたことを懐かしく思い出したとの事である。私が後南朝の研究をしていることに絡んで、その後義父になる当主から、法然所縁の誕生寺に昭和9年に建立された「南朝作州七忠臣並忠死忠魂碑」に我家も末裔として載っている家柄であることを知らされた。その後境内にあった碑は、新しい第2駐車場に平成17年に移設されたが、新婚のお二人が誕生寺の謂れの忠魂碑に手を合わせたのが懐かしそうに思い出され、一瞬お二人の顔が薄赤くなった。二人だけの思い出までは言葉にはならなかった。

碑の台には関係者の大勢の名前が記されているが、その中に「原田三河守佐秀(すけひで)」の後裔及び縁故者一覧の中に小原住人延原〇〇と刻まれているとの記憶である。それ以上は、ご夫妻は思い出せない様子。お父様から詳しくお聴きのことと思うが若い

お二人はそれから長い人生を歩んできた。これだけ諳んじているだけでもたいしたものだと関心しながら、私の浅学で「それは菅原道真の末裔で菅家七流の一族が大正天皇から正五位を追贈された慶事を記念して七家を統合した忠魂碑が誕生寺に建立された」ことを説明して納得いただく。私は「近いうちに菅家七流一族のことをテーマにして纏めたものを作りましょう」と約束し、この話を締めくくった。

話は進み奥さんのお母さんの実家が東手の尾根の頂上に近い是里(こりさと)で、集落は「物理=もどろい」と称する曲がりくねった山奥に母方の里があり井上姓が多く、何故こんなところに住むようになったのか子供心に不思議であったと、その頃を回想し、親から「井上一族はその昔には武士で戦いに敗れてこの物理(もどろい)の里に隠れ住んで今日がある」と聞かされ、何時の時代のどの戦かは知らされなかった。との事である。「先祖は信州長野では」と話を向けると大きくうなずいて「井上かやた」(=正式には井上賀弥太で秀男氏の実父)の名前を覚えているとの事であった。

実は日本先史古代研究会の仲間、「きび考」5号に井上秀男氏が物理在住の井上一族の仲間と信州長野を探訪した文章を掲載され、当地との交流の様子を知っている。そのことを話すと田中夫妻は、大感激され是非「きび考」を拝読したいとの事である。ひょっとすると田中氏の奥さんの母方の実家が井上秀男氏の分家である可能性も出てきた。井上氏と私は特別に入魂で酒席での話題がまた深まりそうで楽しい限りである。(井上氏は岡山歴史研究会の運営委員)

そこで仲間と秋の美作路を謂れの故地の探訪を企画した。

## (二) 紅葉を求めて美作路に出立

田中夫妻と仲間の井上秀男氏を案内役にそして車の運転は樋口俊介氏、共に歴史系の仲間である。11月20日早朝より出発した。先ず最初は道順で誕生寺に向かう。それでも岡山からは1時間たっぷりかかる。参加者は若くて60代、上は80代になる外見は立派な初老ばかりであるが、子供の頃の遠足のあの小躍（こおど）りする昂揚感はいくら歳を重ねても変わらない。小休止で停車すると新しく岡山市に編入され今は北区と称する県の中心域に来ていた。志呂神社を過ぎて旧久米南町に入った。樋口氏が「この近くに親友が居る」と携帯を掛け、なにやら話が弾んでいる。神目支館長をしている松田洋司氏のような。

「仲間が来ているのならすぐに行く」と誕生寺で合流することになった。国道53号線から門前の小径に入ると誕生時の境内だ。駐車は「忠魂碑」の隣に横付けする。

## (三) 誕生寺

岡山県には宗教家が多く育っている。その中でも浄土宗の開祖法然上人は後継者の親鸞と共に鎌倉時代に新しく民衆に仏教の道を広めたことは衆知の通りである。このお寺には地元の檀家が少ないと聴く。浄土宗の「特別寺院」として別格の扱いを受けての浄財で、多くの文化財に指定されている塔坊や仏像の多くが、後世の我々に極楽浄土への想いを誘っている。そうした信仰の波が絶えることはない。

法然が生まれたのは、源の姓を改めて漆間と名乗り美作国久米の押領使としての武士の家柄である父（時国）と、母方は秦氏（古代有力な渡来系氏族で岡山には痕跡が多い）で、母の姉は菅家に嫁ぎ実家は奈義で住職をしていた、そんな親族の中で育った。しかし九歳の折に父時国が配下の遺恨による夜襲で深手を負い落命する。息子の勢至丸（後の

法然）に「父の恨のために敵を倒せば、その遺恨が続くことになる」と悟した。息子勢至丸は母方の叔父で、奈義にある菩提寺の院主観覚得業に弟子入りし15歳で比叡山延暦寺で天台宗を学んだとされています。

誕生寺の境内は秋の盛りで大銀杏の紅葉を囲んで多くの画筆を持った仲間にも囲まれていました。境内奥深い所には田中婦人の実家である延原家の古い墓所も囲みの中にあり、見所は付きません。当日は文化財の保護をする防災設備の点検を当社の社員が担当しホース等を拵げていました。偶然の出来事でした。

## (四) 菅家七流忠魂碑のこと

菅原道真公の末裔で三穂太郎のことは後述しますが、その子孫が後醍醐天皇の時代に忠義を果たした活躍が、大正天皇に追贈され、その忠魂碑が誕生寺に建立されている。今回の探訪の目的の一つはこの碑を確認し先祖の御霊（みたま）に拝したいとの願いを届きたい仲間が集った。



忠魂碑 田中康之氏撮影

菅原満佐三穂太郎には7人の子供が居り、作州地域でそれぞれの領地に城を持ち有力豪族として勢力を伸ばしていた。以後は地名を取って名乗って今日に至る。

元弘三年（1333）二月、伯耆国の船上山に名和長年は隠岐から脱出した後醍醐天皇を迎え近隣の各地に檄を發します。美作菅家はこの時、一族揃って義兵を上げ鎌倉政権（北条）を倒幕し建武政権が樹立することになります。赤松円心や児島高德の活躍は『太平記』の名場面です。菅家一族は総数 1500 余名内騎馬武者 300 余が参戦します。京の都での戦いは元弘三年春三月奮迅な活躍で「壮烈悲絶物凄し・・・」と、この忠魂碑を建てた漆間徳定誕生寺住職は『梅花余香』に書き残しています。しかしこの戦いの中で菅家七流一族の最期は「27 名皆潔く討死」し、南朝の礎（いしずえ）として消えて行ったのであります。

この論功が大正 4 年 11 月 10 日に特旨を以って先ず有元佐弘（満佐の曾孫＝菅家の宗家）弟の有元佐光が従四位をそして次の弟である有元佐吉が正五位を贈与され、大正 8 年 11 月 15 日には植月重佐と鷹取種佐が正五位を、最後に大正 13 年 2 月 11 日に福光佐長と原田佐秀（すけひで）が追贈されます。

昭和 7 年 1 1 月に原田佐秀の追贈記念碑が旧真庭郡木山村大字鹿田の眞光寺に建立し特旨の御沙汰書は諏訪神社に奉納されたとの記録があり、田中氏が現在の眞光寺住職に電話で問うたところ、お寺には無いとの返事であり、真相究明には詳しく調べる必用もありそうです。歳月の流れは遺憾ともし難いものであります。

昭和 9 年になり菅家七流の一族と関係の深い（法然上人の母が秦氏の姉妹で片方の姉妹が菅家に嫁いでいる）誕生寺の住職らが発起人となりこの忠魂碑が建立されます。当時の浄財 2500 円で同年 9 月 4 日午前 11 時に除幕式が執り行われました。この原田佐秀の一族に田中夫人のお父さんが居てこの忠魂碑建

設に浄財を寄贈されていることが刻まれています。



**岳父延原鞏男氏の名前を田中氏が発見**

今回の参加者が碑文を調べていると、松田氏も到着し、しばらく同行する。

### （五）井上家先祖碑のこと

井上家のことは“きび考”第 5 号に今回同行の井上秀男氏が寄稿され、詳しく書かれているので省略するが、田中氏の奥さんの母方の里が井上秀男家の分家で、現在は田中夫人の義理の従兄婦人がお一人で家を守っているとのこと。秀男氏と田中婦人は血の繋がった身内であった。車での移動では道も新しくそして広くなり、時間もかからなかったが、婦人が母親に連れられて登って来た小路は、急な坂を上がり碑の立っている界限に面影が残っていた。それにしても立派な先祖碑である。裏面の謂れ文は井上氏のお父さんによるもので達筆な刻印がなされている。



**井上家の屋敷内には祠が祭られている**

井上氏の実家は、今は空き家になっているが、

お父さんが郷土史家だけに屋敷にも祠があって子供の頃に遊んだ古木に腰掛けたことを、懐かしそうに語る井上氏の口元は、童顔になっている。

楽しみに待っていてくれた分家の老婦人が土産に準備してくれたお手製の「栗おこわ」を全員に戴く。清らかな棚田で採れたお米と、この山里に自生している柴クリの渋皮を丁寧に剥き気持ちのこもった「おこわ」は最高の歓待であった。お気持ちと共に戴いて帰路に立つ。車が足早に去るのを庭先に出て一人手を振る婦人に哀愁の秋を感じた。

## (六) 美作南朝終焉の地

第96代後醍醐天皇（南朝）は孫の第99代後龜山天皇で終わり第100代後小松天皇から今日まで北朝系の天皇家が正史として続いている。南朝は吉野にて消滅したことになるが、実は隠された南朝の歴史がこの美作に存在する。津山市の東隣に植月なる地名が現存するが、そこに後醍醐天皇の孫の親王が御所を構えて254年間皇籍を保持し、その事実を時の政権に抹殺された痕跡が残っている。その一つが今回訪問した終焉の地である。

**背景の山の上に周匝のお城が見える**

**古木の榎木 すぐ下に石の祠がある**



**美作後南朝終焉の地 史跡碑が並ぶ**

**この写真の反対側の山に月の輪古墳が存在**

美作後南朝第九代良懷（よしやす）親王（こ

の時点では皇籍を離脱され平民）が宝永6年（1709）正月轢死（横死）し埋葬された地が現在の久米郡美咲町飯岡（ゆうか）の田圃の中に存在する。地元民からは「我王さまの墓」として今の写真に残る榎木とその下に小さな石の祠があり、森家所縁の我原家が代々墓守をしていたと聴く。

立派な碑文は後に同じく美作後南朝の末裔で後醍醐天皇から26代当主流王（りゅうおう）農（あつし）氏とその娘（弘子）さんが平成11年から12年に建立されたものである。流王家も平民に降り県北を中心に末裔が点在するが、王の流れを苗字にして遺徳を伝えている。

美作後南朝の歴史は250年間に及び、その上歴代の北朝系支配者から弾圧を受け、当然正史や一時保護をした森家の歴史書にも登場しない。

正史南朝最後の第99代後龜山天皇からその孫の尊義（たかよし）親王は三種の神器を奪回し美作の植月にて第101代高福（こうふく）天皇として10月29日即位します。年号も嘉吉から天靖（てんせい）と改元（1443）され美作後南朝初代であります。以後屈折はありますが、地元有力武家等（菅家など）に保護されて統皇を続けます。

関が原合戦後慶長8年（1603）森忠政が津山に18万6,500石の大名として入府しますが、アンチ徳川の毛利や宇喜多の残党や後南朝を守護する有力部将も控えています。結局「美作南朝を守る」約束の上で統治を進め津山城下の整備を行います。忠政は7千石で植月御所を守りましたから（徳川家は天皇家に2万石の扶持を与えたといいます）相当の厚遇をしていたこととなります。

しかし残念ながら忠政は寛永11年（1634）7月6日に正史では死亡します。徳川側の公卿による振舞＝宴会で出された桃を食した直後から苦しみだしそのまま死亡したとす

る正史を信じれない、多くの遺臣が居りました。その時点で第8代高仁（たかひと）天皇は廃帝になります。徳川家康の孫娘和子（まさこ）が生んだ明正女帝（第109代）が後水尾天皇（第108代）の跡を継ぎ今日に繋がっています。

忠政死後森家には不幸が続きます。結局元禄10年（1697）95年続いた津山藩の森家は断絶し、2万石で播州赤穂に移封（実質上のお家断絶）になりますが、正史では淡々とした列記に過ぎません。真相は「大変な隠された歴史」が展開していたのです。美作後南朝第9代の良懐親王もこの時点で、王号（親王と称すること）を剥奪され平民となり「我王」と自称していたようです。津山藩（当時は松平家）の支援もなく、冒頭に述べた通り宝永6年吉井川の佐伯鴻ノ瀬で、43歳で横死し美作南朝の歴史を閉じます。

### (七) 『<sup>じんよ やたのかがみ</sup>燼余の八咫鏡』出土地

私の手元に赤間神宮が昭和60年1月10日に第81代安徳天皇没『源平八百年記念八咫鏡』なる特別号の小冊子があります。これは主に発掘された春名義雄氏の手記を基本にして、春名氏がこの神鏡を赤間神宮に奉納された経緯などが記されています。



赤間神宮拝殿(下関市壇ノ浦)



八咫鏡発掘並奉献者春名義雄殿 頌徳碑

先ず発掘の経緯ですが、今から54年前の

昭和33年7月13日午後4時30分に地元土居町文化財保護委員の春名義雄氏が中心となって、古誌を調べたその通りの場所にて発掘されました。源平盛衰記で有名な妹尾兼康の末裔が、植月御所の大庄屋をしていて土居の地で代々居住しており近年本家は離散し分家筋が戦後も住んでいます。その妹尾家に伝わることを江戸の末期に編纂された『東作誌』や『作陽誌』が再度発見され、明治大正年間にも多くの研究者が著作されているものがかろうじて残っています。その一部として発見者の春名氏が残した文によると、概略次のようです。

「平家一族が長門の壇ノ浦で安徳天皇を擁して三種の神器と共に海に沈まんとした時、神璽は源氏方に拾われ北朝に収まり、神剣は海に沈んだが八咫の鏡は平家側にいた妹尾兼康の身内が拾い上げ源氏の追っ手を逃れ土居の山中に隠れ住み宝物を守りその後大庄屋として代々栄えた。土居の多和山麓の通称天皇谷の地に『安徳天皇社平の宮』として埋納した燼余の鏡の上に小祠を建てて記録に残した。」

その他にも田中千秋説・原三正説など諸説がありますが、共通点は古い書物に記載されその場所にて発見された事実です。発見者の春名氏の尽力により専門家の鑑定で年代的にも歴史書の伝えと合致し「燼余の八咫の鏡」と判定され、当時の新聞に大きく報道されるに至ります。住民の中からこの「お宝」を奉納する美作神宮建造の話が持ち上がるなど大騒ぎになった。発見者の春名氏は安徳天皇を祭る旧官幣大社の赤間神宮に奉納するのが妥当だとして、地元と意見が別れ所有権を求めて裁判沙汰になりましたが、結局現在壇ノ浦の赤間神宮に奉還され神器として大切に保管され、拝殿の右正面に大きな頌徳碑に「言われ書」を碑文にして建立されています。出土した県境の国道にも大きな看板と

出土地には記念碑や写真が地元の皆さんに依って守られています。是非立ち寄って戴きたいし。長門の赤間神宮にも参拝をお薦めします。



**発掘現地(万能峠付近)の碑**

我々は途中で合流した濱手英之氏の先導で、植月御所（美作市高根鳥羽野）境界にある萬福寺（美作南朝7代尊純天皇は植月御所内の高福寺を現在地＝鳥羽野に再建し萬福寺と改称の上弟の見政院法親王を初代住職にし、次の代も弟をこの寺の住職にしている）などを探索する。付近には立派な宝篋院塔のお墓が末裔の方に守られて新しいお花が供えてあった。



**立派な宝篋院塔のお墓 近くに萬福寺もある**

### (八) 菅原三穂太郎満佐神社

菅原道真公の先祖が美作に任地を持ち善政を行っていたこともあって、道真公の子孫は美作奈義周辺の小城主として勢力を拡大し土地の名前を姓にしていた。

満佐は道真から 14 代で三穂（さんぽ・さ

んぷ）太郎と称し、7 人の子供が居た。博学で住民の尊敬を得ており伝説も多く残っている。三穂太郎は三歩で京まで行ったとの巨人伝説が有名な話である。本人は従五位下玄蕃頭に任ぜられ善政を行ったと伝えられている。



**三穂太郎満佐の立像**

先に述べた菅家七流家は満佐の子供達を家祖として、各地の城主として活躍していた。後醍醐天皇が隠岐から脱出し伯耆大山の麓の御厨に上陸し船上山で名和長年を棟梁に近隣に檄を飛ばし、菅家は宗家の有元（有本）家は一族を挙げて参戦します。

戦国時代も国人として力を保持し、江戸期に入っても森忠政との関わりの中で、植月御所を守り三種の神器を三度も美作植月御所に奉賛しています。末裔の菅直人氏は総理大臣にもなっています。

三穂神社の近くには「岬大明神」「杉大明神」があり三穂太郎を祀っているが、時間も遅くなったので濱手氏とここで別れ帰路に付く。



**誕生寺の忠魂碑で(田中筆者田中夫人井上樋口)**

# 気になる神社あれこれ

会員 井上秀男

## (1)日本海の神、気比神社と気多神社

山陰沿岸や北陸沿岸には紀元前後から大陸や朝鮮半島の新羅から日本列島に流れて来た文化として渡来文化と漂着文化の両面性が有り、渡来文化は朝鮮半島から済州島・対馬・壱岐を経て北九州に意識的・計画的に運ばれた文化です。

また漂着文化は朝鮮半島から対馬海流に押し流されて、長門・石見・出雲地方など山陰から能登半島沿岸にかけて漂着してそれらの土地の基礎となり、それぞれの文化を発展させたものと思う。

山陰や北陸に漂着した文化圏は朝鮮半島の人達と交渉を保持しながら、砂鉄や食塩等を求め、住みよい土地へと、中国山脈を越えて瀬戸内海地域に居住し文化を築いた。今後は山陽の吉備地方から反対に文化を拡大していく。日本海沿岸の石川県羽咋市の気多(けた)大社と福井県敦賀市の気比(けひ)神宮が鎮座している。

気多神社の分布は但馬国気多郡、越前国加賀国江沼郡の気多御子神社、越中国射水郡気多神社、越前国頸城郡の居多(けた)神社等があつて、「気多」の神名、地名は日本海沿岸の中央部に特有の分布していることから、古代のある時期に神名、地名を共有していたことが感じられる。

羽咋郡の気多神社の縁起によると気多の神は多人数の従類を伴って大船で能登半島の北岸に着岸した、異国の王子であると伝えている。能登の一宮として、古代から重要な地位を保ち、祭神は大国主神で、本殿の後方には「入らずの森」として禁足

地となっている。

また気多神社の南東へ 1000m ぐらいのところにある寺家遺跡があつて、縄文時代前期から室町時代に亘る遺跡が存在する。気多大社(神社)は7世紀には存在していてこの地方の有力神として祭祀されて来た。



気多大社(神社)

気多神社には多くの神事が伝わっている。中でも平国祭(へいこくさい)鶴祭(うさい)は有名である。12月10日頃七尾市鶴浦町鹿渡島の断崖で、生け捕りされた鶴は、鶴取部、鹿渡島の年番の3人により鶴籠(うかご)に背負われて二泊三日で気多神社にいたる途中、所縁の神社などに立ち寄る神事は中一日おいて行われ、闇の中で神職と鶴取部の間で問答が行われたあと、鶴が神前に向けて放たれて、神前に進んだ鶴は神職によって忌柴(いみしば)で取り押さえられ、宮仕の手に渡されたあと、海岸で海に向かって放される神事として行われている。

それと蛇の目神事というのがあつて、オホナムチが国土平定にあたって、邑知瀉(おうちがた)の大蛇を退治した伝承に因む蛇の目の目的を弓矢で射って、槍で突き太刀で刺す行事である。気多の神の祭儀や伝承から出雲地方との結びつきを考えると、能登国を含んでいた越(こし)の国と出雲との関係で延喜式の能登の神社には、出雲神話の神々が祀られて、気多の神はオホナムチである。気多の地名は出雲風土記に出雲郡気多嶋と見え、東方に進めば

古事記でオホクニヌシが出てくる因幡国の気多ノ前（鳥取県気高郡）があり但馬国（兵庫県北部）に気多郡などがあって、越と出雲との間には古くから交流があり、それは日本海という海を通じての交流である。

## (2) 気比神宮と吉備津彦神社の本宮

気比神宮は福井県敦賀市曙町に鎮座している。若狭湾の東の端敦賀湾の奥深く海辺の近くにある。



113 気比神宮 古代からの交通・文化の要衝である福井県敦賀市に鎮座する、神代は御食津大神など「気比」を祀り、本殿前の次郎の大神は、山は2年ほど前に再建されたもので、高さ11m、重さは余り、此像のトノの体で造られたという、国指定重要文化財。 撮影 田村啓伸

敦賀は昔から畿内と北陸路を結ぶ交通の要所としての位置にあり、自然の良港に恵まれ、日本海航路の中心的場所として栄えて来た。日本書紀では崇神天皇の時に額に角のある人が船で笥飯浦（けひのうら）に着き、大加羅国（おおから）の王子で都怒我阿羅斯等（ツヌガアラシト）と名乗ったと伝えられている。

これらの伝説から朝鮮半島や大陸との海路が早くから開かれていたと思われ、6世紀末には高句麗使が越（こし）の海岸に着いた記録があります。また日本海を渡る航路は、8～10世紀の渤海使の道でもあった。敦賀地方は対外交渉の場として律令政府からも重要視されていた。

気比神宮の祭神は御食津（みけつ）大神で延喜式には気比神社七座とあり、中央の本宮に祀る仲哀天皇・神功皇后・御食津大神・日本武尊・応神天皇・玉妃命（たまのひめのみこと）竹内宿禰の計七神を祀り、越前国一ノ宮として気比神宮が祀られている。

気比というのは新羅系渡来集団である天日槍（アマノヒホコ）と関係があるとされ備前一宮の吉備津彦神社の本宮は気比比売大神を祭神としていて、敦賀の笥飯（気比）神社と関係があるとされる。吉備と天日槍の関係と吉備族とされる多くの人達が孝霊天皇との繋がりがあ。そして備中国一ノ宮吉備津神社・備前一宮吉備津彦神社は吉備の中山を神奈備山として、山頂に磐座を祀り本宮として、気比大神宮の祭神は気比比売大神（又の名前を気比大明神）でこの神は豊受比売とも称されたと、吉備津彦神社要略に見える。

## (3) 備中の神社 足高山神社・福山の百射山神社と大和の三輪山

倉敷市笹沖に小高い足高山がありその山頂に足高神社が鎮座している。足高山はその昔は、奥津島山あるいはまたの名を小竹島と云われた島で、海（吉備の穴海）であった頃は潮流の激しい場所で、この付近を航行する船は安全を祈り、船の帆を下げた通り神に敬意を払い、そのため帆下げの宮とも称された。



足高神社の磐座

祭神は航海の神で大山津見命である。天日槍の神宝の中に足高玉があり、何等かな繋がりがあると考えられる。足高神社のある場所は大市郷（大内郷）にあたり大市首（おおいちのおびと）が居住していたと伝えられ、姓氏録には都怒我阿羅斯止（ツヌガアラシト）より出ると見え天日槍の子孫と称している。日槍族（ヒボコゾク）は但馬国の出石（いずし）に拠点を置いて播磨地方から吉備地方へと進出して来る。吉備族は天日槍系に関係した人物等が登場してくる

次に気になる神社として、備中国都窪郡三輪村字山根宮山に鎮座する百射山（モモイヤマ）神社がある。この神社の祭神も大山祇命（おおやまずみのみこと）となっている。神社の由緒は宝暦4年の備中集成誌に古老の伝承として触れている。また昭和36年の常磐村誌には「建武年中、南朝の忠臣新田義貞公の部将大井田氏経は百射山即ち福山城主に命じられた時に、式内百射山天神宮の破損を憂いて、宮殿を再建し武運長久の大祈願をした」と伝えられている。この福山城は建武三年に足利直義（ただよし）と大井田氏経の合戦の行われた俗に「福山合戦」である。その時に福山山頂にあった12ヶ寺と百射山神社は炎上し、その後福山城と峰続きの幸山（こうやま）の山麓に幸山城主の石川左兵衛久式（ひさのり）が百射山神社を再建したと伝えられる。近世には百射山大明神または百射山天神宮と称されていた。百射山神社は寛文12年（1672）に幸山山麓から都窪郡三輪村、現在の総社市三輪村字山根宮山に移され、この時岡山藩主池田光政から祭祀料と太刀一振の奉納があったと伝えられている。

この福山については、私は今から17年前に「福山と御崎神社」水原岩太郎著の資料を拝読したことがあり、福山の山頂にも

何度か歴史探訪として訪れている。その時に山手地区の郷土史家であった、守安納平氏に福山城山頂に案内して頂き、郷土の歴史について説明をしてもらった記憶があります。福山合戦の跡地として標高300mぐらいたが総社平野・高梁川・南の瀬戸内海の方角と大変見晴らしの良い場所である。頂上には南朝の忠臣として大井田氏経の表忠碑が建てある。この表忠碑を作った時に山頂にあった多数の石を使用して作られたとのことである。私も初めて頂上に登った時に大変に多い巨石がある場所だと感じた。その後「福山と御崎神社」の本を読んでみて福山が備中の神奈備山として祭られ、百射山神社の別名であったのではと福山を百射山とも称するのである。百（もも）とは諸（もろもろ）の意で、奈良県の三輪山を三諸山（みもろやま）御室山という。いずれも山頂に磐境が存在している。福山の山頂に多数の巨石がある理由と考えられる。神籬（ひもろぎ）の事を漢書には福と言うとあり、山頂に神籬が祭祀されていたのかもしれない。福山の麓の三輪村に菅生谷の地名があり福山の神籬の神なる明現宮と御崎宮を奉祀してある。

福山の山頂から東に降ると平坦な場所があり、大小の無数の石が散在している。これを里人は粟島壇と言われ粟島明神の小祠がある。粟島明神は少彦名命（すくなひこのみこと）であり、頂上の磐境を大己貴命の幸魂奇魂を祭祀すると考えると、奥津磐座でこの粟島壇は辺津（へつ）磐座であるとする、大和の三輪山の磐座と同じ配置になるといわれ、大和の三輪山はまた三室山（みむろやま）とも呼ばれ磐境が三基あると言う事で、こちらの福山にも三基の磐座を有するべきであるが、中津磐座については確認されていないとの事である。この福山の粟島壇については、八木敏雄氏

(故人)が現地に行って実測調査をされています。その時の資料をご本人から直接に戴いています。この福山という備中国の神奈備山として、大和の三輪山と類似した土地名等について今後もっと研究を要することで古代吉備国と大和の関係について色々な角度から箸墓の関係にと発展して行ったら大変楽しみに繋がって来る様に思っています。

備前国一ノ宮の吉備津彦神社は吉備の中山を神奈備山として山頂に磐座を祀り、気比大明神を祭神としている。福山は備中の神奈備山として百射山神社が祀られて東側の少し降りたな所に栗島壇と呼ばれている場所があって栗島明神は少彦名命である。

奈良県桜井市の三輪山を神体とする大神神社(おおみわ)が吉備国の総社市に三輪の地名と、神奈備山と称される福山の百射山神社と三輪の大神の妻である倭迹迹百襲祖姫命(やまとととびももそひめのみこと)と百射(ももい)と百襲(ももそ)に何か関係があるのかと自分なりに考えています。箸墓古墳は卑弥呼の墓であるとの論文を発表されるなど色々な話題となっている古墳とされている。

備中の福山は御室(みむろ)山で、大和と同じ福山そのものを御神体とし、山頂にある磐境を宝殿として祭祀されていると考えられ、栗島壇には少彦名命を祭っている点から大和の三輪山と一致している点を感じられる。

都窪郡菅生(すごう)村大字生坂(いくさか)に鎮座している菅生(すがの)神社も少彦名命を祀っている。現在地は倉敷市祐安(すけやす)である。

総社地域には総社市秦(はた)の正木山山頂にある(標高381m)麻佐岐(マサキ)神社があり磐座があって、石の玉垣で囲まれている。



麻佐岐神社と磐座

正木山山頂へは久代(くしろ)の集落から北西の田広木(たひろぎ)を通って北東へ向かって登るルートがある。山頂からの見晴らしは大変に良い場所です。

今回は福井県敦賀市に鎮座する気比神宮、石川県羽咋(はぐい)市の気多神社と日本海側の神社から、岡山県内の式内社の神社について触れてみた次第です。神社の由緒や祭神について調べる中で色々な視点から解明するには、現地に自分の足を運んで学ぶことが必用であると思った。

#### 参考文献

- 日本海と北国文化
- 福山と御崎神社(水原岩太郎著)
- 古代の日本海文化(歴史公論)

## 連載＝四国八十八ヵ所めぐり

### 「歩き遍路の旅」5

会員 樋口俊介

#### 修業の道場（土佐の国） その1

「24番(最御崎寺)～39番(延光寺)」合計16ヶ寺(高知県)

海を眺め、空を仰ぎ、ひたすら前へ。室戸・足摺の2つの岬を廻り、16札所を拝の旅へ、歩き遍路には遙かな道のりの道場だ！！  
23番札所(薬王寺)に参拝したあとは、およそ80kmかなたの室戸岬へと遍路の道をたどることになる。

当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。これからが修行のスタートです。必ず最後まで歩き通します。

### 第12回目

#### 平成21年4月6日(月)～4月7日(火) 発心の道場区切りウォーク(23番薬王寺から 穴喰町「道の駅」

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヵ所 一泊二日  
約37Km

#### 筆者紀行

目標のゴールまでは僅かでもまだほど遠いが、まずは第一関門の「発心の道場」阿波の国(1番霊山寺～23番薬王寺)までの合計23ヶ寺を歩き終えた。(総距離は約163km)

さあ次は「修行の道場」土佐の国(24番～39番)へ行きます。しかし大変です。何故？23番～24番までは遙か彼方の室戸岬までの約80kmを歩くことです。取り合えず今日は約20kmを歩く予定です。新たな固い決意を秘めて、修行の心と感謝の気持

ちを忘れずに、一步一步かみ締めて前に向かって歩きます。

#### ○ 1日目は23番薬王寺～鯖大師(泊)までの20km.

4時50分に起床し5:55分車で駐車場へ歩いてローソンに友達の人に便乗させてもらい林原駐車場へ。6:45分出発し両備バス倉敷営業所を経由して、津田の松原SAにてトイレ休憩を取り、徳島ICで降りて、途中のお店で昼食を済ませて、前回歩き終えた薬王寺へは岡山から途中の休憩を含め約5時間掛けて到着する。

バスを下車して、軽く準備運動を行い、先達さんの説明と注意事項を受け12:25分ごろから歩き始める。ひたすら空と海を眺めながらの遍路道は、海岸線に沿って国道55号が続く。沿道の方々からの励まし、そして海から山からの澄み切った空気、少し強い潮風を受けながら約4kmぐらい歩いてトイレ休憩をする。道すがらの海はあちこちで荒々しい白波を立てていました。近くの漁師さんの話では、「昨日までは穏やかだった海が、今日は波が高く荒れている」。これぞ修行の道場と実感した。

休憩を10分ぐらいにして歩き始めるが、時おり家の前から「頑張れよ！あんた達どこからこられたの」と良く聞かれる。団体で(今日は35名)で歩いていると特に目立つし、子供さんから見れば、珍しいらしく彼方此方で声が掛かって来る。その励ましのエネルギーを受け元気を取り戻して前へ！「有り難う！」と念じながら前進する。10kmぐらい歩いた所のコンビニでトイレと水分補給等で15分休憩、今日の目標の半分を歩き終えた。



歩き遍路中の筆者

「さあ出発します」とスタッフが声を掛け人数を

確認してスタート。歩き始めると左の足の裏が少し痛む。自転車通学の中高生が帰宅の途中ですれ違いに大きな声で「こんにちは」と声を掛けてくれる。こちらからもすぐに反応をする。そんな事が何とも気持ちよく好感が持て、こちらにも元気を貰いました。舗装道路は少し疲れると思い、時々には海岸の砂地を歩いてみるが意外と歩き難かった。

途中の小松大師にもお参りして歩き始めるが、どこまで行っても同じように、左手には大海原、右手に迫る山並み、そんな風景が延々と続く。目標の鯖大師までに3回休憩をして18:10分に到着した。目標の20kmを約5時間50分(トイレ休憩を含む)で歩き終えたが、両足の裏には豆が出来て膝はがくがくし大変疲れた。早速お風呂に入り、生き返った心地です。夕食の前に護摩堂にて古式由来の豪壮な儀式(お勤め)に参加させて頂き大感激しました。本日の歩数は3万3871歩でした。



鯖大師近くの桜並木が綺麗でした

### ○ 2日目は鯖大師～穴喰道上の駅まで約17km

6時ごろ起床して「へんろ会館」内の本堂でお勤め後に朝食を済ませ、7時25分に前日歩き終えた所までバスで移動。7時35分から本日の目標地まで歩き始める。昨日の疲れが少し残るが、気持ちを引き締め歩き始めると、心地よく澄み切った空気が流れ「ああ美味しい」と感じ、疲れも一遍に飛んで行くようです。擦れ違いの車の窓から顔を出し大きな声で「頑張れよ」と漁師さん風情や沿道の民家の2階から声を掛けてくれる励ましの声援で、気持ちよく

元気が出てきます。四国の方々に感謝感激です！

歩き始めて5kmぐらいの所でトイレと水分休憩を10分取る。歩けど歩けど相変わらず、左手に大海原、右手には迫る山並み。そんな光景が延々と続く。舗装道路を歩くと遍路道と違い、疲れが多く体への負担も大きい。

車道や歩道のコンクリートの割れ目から、風で飛んできた種子が芽を出している雑草を見ると、木々などの生命力や忍耐と、その生きるパワーを感じ雑念が飛んで行く。沿道には桜の花も咲いているが、桜葉も緑を増して来た様で、次の年に花を咲かせる為に、これからの1年間にエネルギーを蓄える努力と忍耐は壮絶な戦いになると思います。日本の桜の花は見事で大好きです。

この事を考えて見ると、歩き遍路で疲れた足が痛む等は話になりません。「論外です」と自認する。そのように気持ちを切り替えながら、3回のトイレ休憩を取りながら約4時間40分(休憩を含め)かけて今日の目標の17kmを歩き終えて、清々しい最高の気分です。有り難う！感謝！と自分に褒めていました。なお本日の歩数は2万4413歩でした。2日間の合計約37kmで歩数は5万8284歩です。



宿泊したホテルから歩く途中の海岸(太平洋)

## 第13回目

### 平成21年5月11日(月)～5月12日(火) 辺地修行の長い道を行く(穴喰町～三津)

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヵ所 一泊二日  
約38Km

## 筆者紀行

### ○ 一日目は穴喰道上の駅から東洋町のホテルまでの18km

5時10分に起床し車で駐車場へ歩いてローソン6時10分半田さんの車に便乗し、林原駐車場へ。両備バス倉敷、児島IC、道の駅・南国、道の駅・室戸を経由しトイレ休憩を3回取りながら穴喰に着き、直ぐに昼食(大変美味しかった)して、前回歩き終えた所までバスで移動する。岡山から約5時間50分もかけて到着した。バスの長旅で疲れました。

13時5分から歩き始める。今日の目標は17kmです。天候は晴れて恵まれた気温で絶好日です。先ず準備体操をしスタッフが人数確認をして36名の団体は2列縦隊になりスタート。まず東洋大師に寄り参拝を済ませ野根に向けて歩き始める。毎度の事ながら舗装道路の割れ目から、雑草や草花が覗いている。この生命力は、計り知れないものがあり、その根性・そのパワー等の精神力を少しでも見習う気持ちを受け入れて、自分の行動に移せば何事も楽に解決し、精神的肉体的に向上出来そうだと自認し、修行の心構えが自然に湧いてくる。



国道の表示が鮮やかだ 隣は大海原だ

歩き出して5kmぐらいで休憩し、水分補給等を済ます。既に県境を越え高知に入ったようだ。歩けど歩けどまだまだ左手には大海原、右手に迫る山並みが続く。そんな光景が延々と続くが、しかし反面そうした海や山を眺がめながらの「歩き遍路」は格別です。また沿道の方々の声援や励ましが、更なる元気の源で楽

しい気持ちになれます。

室戸岬へ向かう海沿いの道は、海からの風をまともに受けてしまうので、家屋は高い石壁に囲まれていました。勿論台風の時等の防波堤も兼ねて居るのでしょう。



ゴロゴロ海岸を歩く筆者

約10km歩いて公園で休憩をしました。あと約7km歩けば本日の目標が達成できます。休憩15分で切り上げ皆さんと励ましあいながら歩きだす。

山々は青葉若葉の輝きに満ちた季節で、心地よい風と新鮮な空気が流れて、歩き遍路には申し分のない一瞬を感じ自然に感謝する。そのあと2回の休憩を取り、本日のゴール近くの「ゴロゴロ海岸」を歩く。さすがに砂地は歩きにくいが何とか歩き終えた。

宿泊ホテルには17時40分に到着する。早速お風呂に入り、やっと疲れが飛んでしまいました。

夕食は19時ごろに取ったあと、一室に6人が集まり、雑談やあつい議論を夜遅くまでする。それがまた楽しい一時になります。

今日は約4時間30分かけて18kmを歩き、歩数は2万7873歩でした。

### ○ 2日目は前日歩い終えた田野町～道の駅・ヤスまでの約20km

4時30分に起床して近くの海岸を1時間ぐらい散策する。美味しい空気やそよ風を頬に受け

水平線を眺めながら散歩する。最高の贅沢を感じる。

食事等を済ませホテルを7時30分に出る。バスで前日歩いた所まで行き、軽い準備運動を行ってから7時50分には歩き始める。

ゴロゴロ海岸を少し歩き、佐喜浜へと砂浜を歩くが、歩き易いところもあるが、足を取られて歩き難いなど、実際に歩いてみないと解かりません。潮風を受け海を眺め山の新緑の鮮やかさが目に沁みる、本当にそよ風を受けながらの歩きは、何者にも代えられない満足感がある。

約5km歩いて10分ぐらいトイレ休憩などして出発。誰かが「さあ元気をだして、出発だ！！」と声を掛ける。参加者の平均年齢は68歳ぐらいと想定？男性は7名であとは女性です。女性の方が忍耐力や我慢強さ等は高いようで、特に83歳の婦人のパワーには圧倒されました。



**岩戸のこの光景は絶品だ**

沿道の草花や木々等の茂りが、生き良いよく、上から垂れ下がり横からはみ出して、時には邪魔になるが、それらの樹木と歩いている我々とは、お互いに共存共栄を意識しながらそんな面持ちで歩を進める。

約10kmと15kmで休憩を取りながら、唯々前進と歩を進める。擦れ違いには「頑張れ」の声掛けを戴き、自転車からも「こんにちは！」と大きな声が通り過ぎる。その都度元気を取り戻すが、足腰の疲れは隠せない。どうか夫婦岩まで歩き、昼食のためバスで室戸の町に

移動。

昼食が済んで再度バスで夫婦岩まで帰りそこから次の当面の目標地である「道の駅ヤス」(三津)に向かってスタート。食べた後なので元気を取り戻した感じで歩く、見え隠れしていた室戸青年弘法大師像(19歳時の姿)が突然大きく見えてきました。高さが21mもある巨大な像だ。



**室戸青年弘法大師像 足もとに涅槃像も見える**

大きな大師の後ろには、これまた大きな涅槃像もあった。階段を登り見学する。この近くには弘法大師が寝起きたと言われる有名な「御厨人窟」「明神窟」や24番札所「最御崎寺」(ほつみさきじ)があるとの事。

まだまだこれから先は長い苦難な道のりですが、ここまで歩いて本当に良く頑張ったと、心の中で自分自身に感謝する。そして5時間20分かけて本日の目標20kmを歩き終える。

気分爽快で！そして次ぎへと気持ちが高ぶる。あとは同行のバスで岡山へ。南国IC・豊浜SA・児島IC・倉敷を經由して林原駐車場で下車。電車で上道駅まで帰り、徒歩で我家に20時25分に帰宅する。有り難う！感謝！の気持ちが横切る。本日の歩数は3万2966歩でした。歩いた距離は合計約38kmで6万839歩になりました。

# 古代吉備を探る(1)

会員 吉備槌太郎(本松一郎)

## 1. はじめに

日本の古代史は謎だらけで、その一つの大きな要因は7世紀末から8世紀における古代史の抹殺説があるが、同感であり古代に力を持った地方の国についての記録は一般に少ないが、特に吉備に関する記述は少なく意図的に消されたと思われる。

消された理由は全国を武力で無く、食料の米や生活用品技術などを供与する事で全国を平和裏に統一している。大王の饒速日(はぎはやひ)尊は西日本は元より東北地方でも人気があり、歴史上から消され、父親の素盞鳴尊は国民に特に人気が高い為に政治的意図で暴れ者とされ、貶(おとし)められている。この時期に古代日本の歴史が歪められ、消されたと原田氏や関祐二氏等は記述される。

この消された時代の日本に関して、古代史研究家の齊藤忠氏によれば、周代中期の紀元前11世紀には倭人の礼節は既に当時の中国の人々にも認識され、孔子も絶賛する「倭は平和な連邦国家」で孔子自身も「東夷の九夷に住みたい」との記述から九州であろうと推察される。

時代は経ても日本は長く平和な時代が続いた筈である。大和国を建国した初代大王は吉備国や明石国と関係が深く、明石国とその周辺には大歳尊を祀る神社が極めて多く大和へ登る為の拠点であったと私は推理している。

吉備は大和大王饒速日尊(大歳尊)や国譲神話で有名な大国主尊の誕生と居住も考えられる。「宇弥神社」は大国主尊と確信するが、「うみ(海)神社」もあて字で大歳尊?と推理している。

古代吉備の歴史や丹国、越国、若狭国、近江国と、火の国、豊国など古代の主要な国も徹底的に消され、忠臣蘇我氏を謀反人に捏造しているが、現在も真逆の歴史がまかり通っている。この事実を含めて歴史の解明に協力して「正しい

古代史の謎解き」に居住地の利点を生かして、真実の発掘に挑んでいます。

## 2. 神乃邊の最中央部を守る東西南北の家

古代吉備国の国境(くにぎかい)と神域の中央部にも、守神(賽の神)を陰陽五行思想によって中央部(神目)から等距離に設置していた。配置場所を確認すれば古代吉備国の範囲と神域の重要度が推定できる。国境の守神(賽の神)を念のために記すと、東は、今は無い摂津菟原住吉(後に摂津の西から東に遷し住吉大社建立と推理)。北は出雲佐太神社。西は伊予(大三島)大山祇神社。南は四国山脈剣山付近の古社だが未特定である。この東西南北が等距離の守神(賽の神)の位置であり、ほぼ古代吉備国の範囲に近いと推理している。

さらに今回ご報告をするのは中央部にも神域を守る東西南北の守神(賽の神)が配置されていた。それもズバリ、東家、西家、南家、北家であった。

さらに、まだ確定は出来ないが、二重に東西南北の家が設置されていた可能性が高まっている。

南氏は久米南町の最南部の安ヶ岬に居住され、久米南町最北部の筒の宮山や笛吹山麓の北庄に北氏が、さらに、古来の配置場所とは大きく異なり移動されているが建部町西部と播磨の石の宝殿で東氏の居住は確認出来た。西氏は情報が無く時間を要したが3方向の家の存在から西氏の存在を想定したが、後に旧賀陽町に、さらに建部町でも西氏の居住が確認され、全ての東家、西家、南家、北家が揃った。この結果から、強く陰陽五行思想に影響を受けた古代吉備国と神乃邊の姿が想像される。なお、先に二重に東西南北の家が設置された可能性に関して少し述べれば、東氏と西氏と北氏の現在の居住場所を地図上に描くと、南氏を除く東西北の家は2ヶ所に居住されるが、古代の配置であり、人の移動は常であり、確かとは言い難いが可能性としての話である。確信的には、過去の吉備の最中央部に古族(槌、物部、大国、加茂の66家と葛城等の9家)の75家すべてが存在し、吉備が全国の中心的な役割を果たしたと思われ、陰陽五行が基の政治で東西南北の磐座、寺社、家

の配置もされたと思います。なお、詳細配置に関しては現在も調査中です。

### 3. 津山中山の物部氏と神乃邊

神乃邊神目の天王山には和同年間の吉備前国の分国時に津山中山を追われた肩野物部長者乙磨呂が行き先を失い、先祖の槌(土)一族がいる神乃邊(当時は加賀美庄、後に弓削庄)に逃れ、最初は天王山の麓で松尾谷(大霜谷)の西に祀る岩井神の傍に中山の神を祀り、屋敷を建てた後に屋敷の傍の伊勢谷に移したと伝わるが、和同6年に天王山の頂上付近に津山中山の豊穰の地を奪った不比等系とする「しろ、ごろ」の敵名をかぶせた志呂(しろ)神社を建立するが、先祖地での物部勢力再興を恐れた中央が吉備前国でも神域で影響力を残していた中心部を意図的に分割して美作国を建国(来年に向けて現在は美作國建国 1300 年祭実施中)している。

この志呂神社は、実質は城の役割を担い南からの守りに建立されている。参考に述べれば肩野物部長者乙磨呂が和同3年に建立した仏教寺の資料には饒速日尊から6世孫(5代目あり)の伊香色雄(いかがしこお)命の後である。天孫本紀で伊香色謎(いかがしこめ)命=古事記は伊迦賀色許売命の弟で、姉は孝元天皇⑧の妃で開化天皇⑨の皇后であり崇神天皇⑩の母ともある。崇神7年8月しばしば災害のある事を憂いておられた天皇に穂積臣の遠祖大水口宿禰ら3人の奏上する各人の夢に貴人が現れ、大田田根子を父の大物主大神の祭主とし、市磯長尾市をもって倭大国魂神を祀る祭主とすると天下泰平になり、物部連の祖・伊香色雄命(いかがしこお)は神班物者(かみのものあかつひと)に任じられ、物部八十手に作らせた祭神の幣帛(へいはく)を以って大物主、倭大国魂神を祭後に八十万の群神を祭ると疫病は止み国内は鎮まったという。(紀) そのとき布都大神を祀る社を石上邑に遷し、天璽瑞宝(あまつしるしみずたから)も合わせて祀って総称である「石上大神」を氏神としている。記の崇神段に伊香色男命に命

じて天の八十平瓮(やそいらか)を作り天神地祇の社を定めたとする。旧天孫本紀は父は大綜麻杵命で母は高屋阿波良姫と記載している。

阿波良姫と関係すると思われる神乃邊神目の東端の峠地区(古代に栄え分国で真半分)の峠神社には伊邪那美尊が主祭神で、配神として阿波良和尊(伊勢天照皇大神宮神主)が祀られ、伊勢神宮に問合せも古い記録は無く不明であった。時代的に確定は出来ないが阿波良姫と前後はしても近い時代と思われる。そして時代は多少異なるが建部町(御名代の地)の名の基である大和武尊が伊勢で草薙剣を叔母から授かった事の解明の糸口になると思われる。さらに、関連する神乃邊の地名として旧加茂川町に阿波良の地名があり、神社は愛宕神様を祀るから槌系と推理できる。伊香色雄命の孫には葛城氏・蘇我氏・紀氏・波多氏・巨勢氏・平群氏などの中央諸豪族の祖とされている武内宿禰がいます。なお交野関連を調べると乙磨呂の先祖である伊香色雄命は大臣となり一族に物部の姓を賜っている。その子で多弁宿禰は交野連(かたのむらじ)となり天野川流域を開拓し、稲作を盛んにしているが、この頃より肩野物部と呼ぶようになったと記してある。

### 4. 赤石の謎を探る

昔の我家の屋敷跡は松尾川を取込だ造りと思われ、松尾川の中州には赤い大きな磐座が存在した。約2千年以上も経過して表面は傷み苔も生え黒ずんでいたが、実に風格ある綺麗な赤石だったが、十数年前の河川改修時に業者が関与したらしく盗まれている。大きさは周囲約3.5~4.5mで地上高は約1.5mだが赤石様と呼ぶ赤い磐座が存在した。岡山大学大学院地質学の鈴木教授は、赤石は花崗岩中にまれに在るが、このような綺麗な磐の存在は極めて珍しいと語られ、この地層は備前と播磨の境で地中に潜り込み、明石(赤石)辺りで再び地上に現れる。調査結果で赤石は全国に祀られている。主な場所として、兵庫県明

石(赤石)は吉備の一族が大和に入る前の拠点の明石国で、三重県熊野本宮や伊勢神宮の内宮にも存在し、北は平成 24 年 10 月にお伺いしたが、東北の岩手県柴波(柴波は石の赤紫色で赤石神社)から南は熊本県宇土や宮崎県高千穂の赤石神社まで各地に赤石神社が存在する。神社以外に石棺や石室にも赤石が使用され、さらに古墳の謎を解く鍵と言われる楯築遺跡や吉備の中山頂上部の磐座からも水銀朱(朱は硫化水銀で高貴な色)が塗られた磐座が幾つか確認されている。

吉備の造山古墳や千足古墳をはじめ滋賀県に至るまで熊本県宇土市(平成 22 年に元松市長を訪ね宇土訪問)の赤石が石棺に使用されているが、当地にも赤石神社が存在する。吉備と九州火の国との関係を示す造山古墳群の中の陪塚第 5 号古墳は 5 世紀後半に造られた全長 7.5 m、三段築成の前方後円墳で千足古墳または千足装飾古墳と呼ばれている。



千足古墳



公開時写真

吉備地方で最も古い形式の横穴式石室が築かれている。資料を転記をすれば「石室の構造や直弧文様は九州西北部の装飾古墳の石室に類似し、被葬者が北部九州との深い繋がりを示唆している(部分削除)」と記述され、古代の九州、特に「火の國」との深い関係が確認出来る。明石(赤石)に関しては古くは満潮で沈み干潮で赤石が見えた記述や船上からの参拝記述もあるが、伊能忠敬の地図と陸軍省の地図で場所が異なり、現在の明石市の潜水調査写真と昭和初期に記述の磐の大きさは異なると思われ、類似の赤石が複数存在する可能性もある。



赤石神社



宇土馬門石 石切場

平成 19 年夏に薬師寺氏の本に古代の謎を解く重要な遺跡、楯築遺跡の磐座は朱で赤く塗られていたと記述される。古代の兵庫県南部に赤石が在り、大化改新の前は、明石国が存在し明石郡、美囊郡、加古郡、印南郡の四郡が明石国とされるが、後に播磨国と一体になっている。

新たに記述するが、群馬県南部の伊勢崎市に赤石郷が存在し、戦国期にも赤石と呼ばれていた事が判明した。調べると平成 19 年(2007 年)に隣接の太田市と特例市に成り、赤石郷は 1566 年(永禄 9) 由良氏がこの地の年貢を伊勢神宮に献じ、たことから伊勢前(いせさき)と呼ばれ、転じて伊勢崎となっている。



宇土の赤い石棺と古代船

群馬関連では 40 年も前に前橋の治山関係者から群馬県と岡山県の山は良く似ており古くから山上まで人が住んだ小便山が多いと聞いていたが、5 年程前に我家先祖が古代と戦国期に関係をした備前と美作の國境の天王山に在った簀ヶ瀬(伊勢畑)城跡を「美作全域の中世山城の縄張図の作成」に尽力された山形省吾氏に調査して頂いた。この時に群馬周辺の山城を全て廻られた息子さんも同行され、群馬にもほぼ同じ山城が存在する事を指摘された。その後の調査はして無いが戦国期にも関係が有った可能性も残る。

### (1)「赤色、朱色」に畏敬の念を持った古代人

赤石様は赤神石?とも言い、先にも述べたが大きさは周囲が約 3.5~4.5m で地上高は約 1.5 m(地中は不明で+α)の赤い磐座(いわくら)が工業者に盗まれている。赤色、朱色に関して他から借用記述すると『“朱色”は生命の根源である血の色で生命の躍動を示す。水銀から採れた朱色は色があせない事から、古代人にとっては“生色”・“死の色”でもあり、邪霊・悪

霊を排除する僻邪(へきじゃ)の色ともされてきた』とする。さらに『稲荷社に朱色の鳥居を立てるのは、単に標識・飾りというより、社・霊地の神聖性を守る呪的行為で鳥居そのものが、聖と俗の境界・結界に立つ呪物であることから、その呪力をより強力にするのが朱色ともいえる』とある。

6世紀前半の継体大王の陵墓とされる今城塚古墳(大阪府高槻市) 7世紀前半の推古女帝の初陵とされる植山古墳(奈良県橿原市) など、おもに関西のいくつかの石棺に熊本県宇土半島産の阿蘇ピンク石(阿蘇溶結凝灰岩)が使われていることは、これまでの研究で明らかになっている。

## (2) 九州以外で確認の阿蘇ピンク石(馬門石)石棺

### 阿蘇ピンク石(馬門石)

1	造山古墳	岡山県	岡山市
2	築山古墳	岡山県	瀬戸内市
3	長持山古墳	大阪府	藤井寺市
4	峯ヶ塚古墳	大阪府	羽曳野市
5	今城塚古墳	大阪府	高槻市
6	籾子塚古墳	奈良県	天理市
7	東乗鞍古墳	奈良県	天理市
8	植山古墳	奈良県	橿原市
9	兜塚古墳	奈良県	桜井市
10	慶雲寺	奈良県	桜井市
11	金屋ミロク谷	奈良県	桜井市
12	野神古墳	奈良県	奈良市
13	円山古墳	滋賀県	野洲市
14	甲山古墳	滋賀県	野洲市
15	千足古墳	岡山県	岡山市
16	小山古墳	岡山県	赤磐市
17	築山古墳	岡山県	長船町

戦国期迄の元松屋敷を流れる松尾川の州には赤い磐座の赤石様が十数年程前まで存在し、西に約100m真西の荒神様の御神体も赤石であり、毎年12月第一日曜日に荒神祭が行われ、今年も甘酒の元を御供えした。就実大学先生で

元岡山市文化財課の出宮氏は吉備中山の磐座で朱成分の検出を聞かれており、古代の神々と我家先祖榎系を解く鍵になる予感がする。19年6月に熊野三社参りで古代に一族の移動伝説があり苗字七千傑の斎藤氏資料(ネット上)に記述の熊野で本宮道の駅に「赤石の磐座」があり驚いた。早速に語部の坂本勲生氏に調査を頂いたが、この磐は三越川で榎を御供えしてた磐であった。調べると古来の本宮は熊野川・音無川・岩田川の合流点の「大斎原(おおゆのはら)」と呼ばれる中洲にあったのですが、明治22年の洪水で多くの社殿が流出し、流出を免れた社殿を現在地に遷しており、赤い磐座は古来からの磐座の可能性もある。なお神功皇后の帰京前の香坂王と忍熊王の反乱の記述には天皇之陵＝赤石(明石)とも記述されている。

## 5. 神乃邊に畑氏の中央部もあったか?

最中央部(小領域)の北部に畑氏の地区が在り、現在の宮地神社辺りを中心とする東畑、西畑、南畑が存在した。しかし、北畑の地名は見出す事が出来なかったが、道の駅の辺りやや北東が最も北畑が存在した地と推理できる。塩之内の北部に羽出木があり波多氏の波多神社があり、誕生寺の法然上人の父は押領使漆間時国(うるまときくに)で、母は秦氏君と記載され詳細不明ながら宮地か羽出木の出身と思われる。熊谷直実は桓武平氏との説もあるが、石橋山の戦いの後は源頼朝に臣従し御家人となるが、平清盛の弟である平経盛末子の平敦盛と一騎打ちで若い敦盛の首を落とし、世の無常を嘆き出家し、浄土宗他力念仏門の開祖、法然上人降誕の聖地、上人誕生の旧邸を建久四年(1193)法力房蓮生(熊谷直実)が法然上人の命を奉じこの地に来て寺院に改め誕生寺を建立をしたとする。

## おわり

今回は吉備神乃邊と赤石に関して記述したが、次回は、神乃邊の神饌が近畿方面に広まった事が判明したのでご報告致します。

# 葦嶽山(日本ピラミッド)登山記

会員 濱手英之

以前より気になっていた日本ピラミッドに登る機会が突然やってきた。本業で薪ストーブを販売設置している私は秋風が吹くころより工事等で忙しくなり仕事中心の生活となってしまう。そんなとき、広島での仕事が予定より早く終了し、時間ができたのである。遠くに仕事に行くとき、その土地の神社や遺跡をできるだけ寄って直接見るようにしている。三次経由で中国道に向かおうと下道を走りながら考えた。

何処かに、まだ寄っていない遺跡等がないだろうか？ 広島県の北部は意外と山深く、雪も多く降ったりするがたしか三次の古墳は3000基と云われ古代の繁栄が伺われる。

そんなことを考えていると、庄原のピラミッドのことを思い出した。

昭和の始め、酒井勝軍(かつとき)氏により2万3000年前のピラミッドであると発表された葦嶽山(あしたけやま)は広島県庄原市にあり、日本ピラミッドとして有名である。



酒井氏は、山頂にて、直径3mの太陽石とそれを取りまく円形と方形の磐境を発掘し、尾根続きの鬼叫山(ききょうざん)には方位岩や供え物台があり、葦嶽山はその本殿、鬼叫山は拝殿であることを発表した。

その後、この説を異端邪教の類とみなした当時の国家権力によって、頂上の中心岩や敷石等は破壊されたらしい。また、高さ数メートルでたくさん立っていたらしい神武岩のような角柱もほとんど倒されている。



以前から一度は行ってみたいと思っていた場所だ。早速ネットで場所を調べ、ナビで向かう。便利なものである。

天気は曇り、時々雪と条件は良くはないが、私はこの時点で日本ピラミッドを甘く考えていた・・・



お昼前であったが、近くに店も無く、とりあえず登ってみようと思い、看板に従って進むと、登山コースの方に行ってしまった・・・ もう一つファミリーコースというのがあるはずだが、わからず、時間もないのでそのまま上ることとする。頂上まで1.6kmとの表示がある。何とかなるだろうとカメラと、タオルと手袋と歩きやすい靴で出発。このとき、飲料を忘れるという間違いをおこす。

しばらくは、ゆるい歩きやすい道が続く。歩道には枯葉の絨毯があり、ところどころ雪が残っているが、快適な道である。川のせせらぎを聞きながら登っていると小雪が降ってくる。こんなところで遭難するはずはないだろう・・・なんて考えながら急斜面で立ち止まり、また登り始めたところで事件が起きた。「ズ・ザザザザッ！！」という大きな音とともに左斜め上から何か落ちてくる。石か、枯れ木が落ちているのかと思わず身構えると、ほんの6～7m程後ろを物体が落ちていく。とりあえず無事だった・・・と思いながらよく見ると大きなイノシシである。しかも2頭が連なってそのまますごい勢いで縦走している・・・当たらなくてよかった・・・

猪突猛進とはよく言ったもので、すごい勢いであっという間に視界から消えた。写真は撮れなかった・・・残念。



こんなのが2頭で爆走



登山コースと書いてあったが、山頂近くはまさしくそうである。急斜面や岩場を登っている。喉

(のど)が渇く。何度も引き返したくなる衝動を抑える。振り返ると、ガスってはいるがかなり高いところまで来ているようだ。木に遮られて上も良く見えない。半べそを書きながら、上の休憩所まで辿(たど)り着く。

そこから、まずは葦嶽山へ。数十メートル登る。頂上には数畳の広場がある。昭和初期まではここに直径3mの太陽石があったらしい・・・そして、隣の鬼叫山に行く。ここには素晴らしい磐座が残っている。神武岩をはじめ、明らかに加工された巨石が待っていてくれた。頑張っで登ったかいがある。

日本中の見晴らしの良い山の上には、まだまだたくさんのお宝が残っているだろう。これからもいろいろな磐座に逢いに山に登りたい。



広島県庄原市本村町 葦嶽山(日本ピラミッド)

問い合わせ先:庄原市商工観光課

電話 0824-73-1179

また、近くにある蘇羅比古神社の狛犬は空を向いています。

# キルギス共和国と日本

会員 丸谷憲二

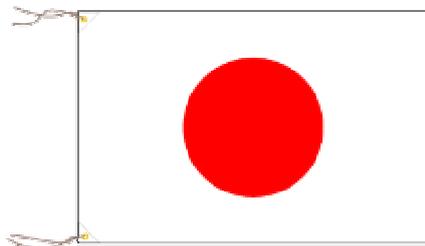
## 1 はじめに

日本(Japan)の国旗と一番似ている国旗は、キルギス共和国(Kyrgyz Republic)である。

キルギスでは「大昔、キルギス人と日本人が兄弟で、肉が好きな者はキルギス人となり、魚を好きな者は東に渡って日本人となった。」とされている。キルギス人と日本人は顔がそっくりである。在京キルギス大使館の開館は平成16年4月22日である。



赤地に黄金の円



白地に赤の円

## 2 キルギス共和国

キルギス共和国(キルギス=黠戛斯)は、中央アジアにある旧ソビエト連邦の共和国。首都はビシュケク(旧名フルンゼ)。かつてはキルギスタン(黠戛斯坦)が用いられた。北からカザフスタン、中華人民共和国、タジキスタン、ウズベキスタンと国境を接している。ソビエト連邦から独立したウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタンとともに中央アジアを形成し、独立国家共同体(CIS)加盟国である。



クルグズ(キルギス)の語源は「кырк(クイールク)」が40の意味で、40の民族を指し、また中国人にかつて「гунны(グンヌイ、匈奴)」と呼ばれていた背景から、それらを合わせてクルグズとなった。テュルク系言語で40を意味する「クウルク」に、娘や女の子を意味する「クウズ」をあわせた「クウルク・クウズ」は、“40人の娘”という意味になる。中央アジアに広く伝えられるアマゾネス伝承との関連をうかがわせる。したがって、「40の民族」というよりも、「40の部族」ないし「40の氏族」という意味になる。

### 2.1 キルギス共和国の古代史

『史記』などの古代中国の歴史書に名前が見られる堅昆(けんこん)が、キルギスの名で記録された最初の民族集団である。彼らは南シベリアのイェニセイ川上流域で遊牧生活を行い、匈奴に服属していた。その後、同じ地域にいた契骨(けいこつ)もやはりキルギスの名を記録したものである。唐代には黠戛斯(かつかつし)として記録され、はじめ突厥(テュルク)、のち回鶻(ウイグル)に服属していた。840年に

決起してイェニセイ川から南下し、回鶻を滅ぼした。しかし、回鶻に代わってモンゴル高原を支配することはできず、その後もキルギスの名を持つ集団はイェニセイ上流域に留まった。13世紀にチンギス・カンがモンゴル帝国を建てるとこれに服属した。キルギスが突厥の支配下に入るのは6世紀である。

- 1世紀頃 - 匈奴の支配下に入る。
- 6世紀 - 突厥(テュルク)の支配下に入る。
- 7世紀 - 唐の支配下に入る。
- 8世紀 - 回鶻(ウイグル)の支配下に入る。
- 9世紀 - 回鶻を滅ぼす。
- 13世紀 - モンゴル帝国の支配下に入る。

## 2.2 キルギス共和国の国旗の由来

中央に輝く太陽と、キルギス人の移動式住居「ユルト」の天井を象っている。太陽が放つ40条の光は、国民を構成する代表的な40の部族を表わしている。

## 3 日本国の国旗の由来

日本では聖徳太子が遣隋使に託した文書以来、自国を“日出ずる国”とする考え方があり、赤い日の丸は日の出の太陽を象徴している。また紅白は日本の伝統色で、めでたいものとされており、赤は博愛と活力、白は神聖と純潔を意味する。

### 3.1 国旗国歌法

日の丸は古来から用いられてきたが、かつては法律によって明示的に定められたものではなく、長い間「慣習」として使用されていた。明治3年1月27日制定の商船規則で船舶の識別旗として日の丸が定められたが、この法律には日の丸が国旗であるとは明記されていなかった。その後、平成11年8月13日に公布・施行された国旗及び国歌に関する法律によって、公式に日の丸が日本の国旗であると定められた。

## 4 まとめ

現在のキルギスの65%が日本人に顔つきが似ているキルギス人である。残りの35%はロシア人やウズベク人などの白人種である。秦氏の出身地である弓月国はキルギスのすぐ北方にあった。西暦650年頃に滅亡している。秦氏はキルギス周辺から日本へ渡来している。キルギス人は、突厥族やモンゴル族のアジア系の遊牧民族の末裔である。キルギス人が日本人と顔つきや背格好が似ているのは当然である。

## 5 追記「東突厥斯坦共和国」

大井 透氏から平成23年9月7日に「中国の新疆ウイグル自治区」に関して下記のメールをいただいた。

東トルキスタン共和国 現在の中国の新疆ウイグル自治区を、漢字で書くと東突厥斯坦共和国 トルキスタン である。

東トルキスタン共和国 (ウイグル語: شەرقىي تۈركىستان جۇمھۇرىيىتى, Sherqiy Türkistan Jumhuriyiti) は、テュルク系イスラム教徒によって、20世紀前半に中華民国の新疆省であった中央アジアの東トルキスタン地方において樹立された政権。

歴史上2度にわたり、それぞれ別々の地域を拠点として樹立された2つの政権があり、いずれも一定の期間東トルキスタンの一部において実効的な独立政権を実現した。現在はアメリカ合衆国に東トルキスタン共和国亡命政府の本部が2004年9月14日にワシントン置かれている。

東トルキスタンには、古くはインド・ヨーロッパ語族の言葉を話す人(アーリア人)が居住していた。タリム盆地の辺りには古くは疏勒、龜茲、焉耆、高昌、楼蘭などの都市国家が交易により栄えた。しばしば遊牧国家の月氏や匈奴などの影響下に入った。

前漢の武帝の時代に匈奴が衰えると今度は前漢に服属し、以後は北方の遊牧国家(突厥)と東方の諸帝国(唐)の勢力争いの狭間で何度か

## 編集後記

宗主が入替わった。タリム盆地の都市国家郡は7世紀までは存続し、以後は数百年かけて徐々に衰退していった。一方、タリム盆地の北に位置しモンゴル高原の南西にあるジュンガル盆地には、古来より遊牧民族が暮らしており、主にモンゴル高原を支配する遊牧国家（匈奴、突厥）の勢力圏となっていた。しかし、突厥の支配時代にテュルク系民族集団の鉄勒の中からウイグル（回鶻）が台頭し、8世紀には突厥を滅ぼした。この時期のウイグルは、タリム盆地、ジュンガル盆地、モンゴル高原など広大な領域を勢力圏とし、多くの部族を従えたため、ウイグル可汗国と呼ばれている。ウイグルの影響力は絶大であり、安史の乱等ではしばしば唐を助け、婚姻関係を結ぶなど関係を深めた。

ウイグル可汗国は840年に崩壊する。これによって、モンゴル高原より逃亡したウイグル人は天山山脈北麓に天山ウイグル王国を建国し、同時期に別のテュルク系民族がタリム盆地にカラ・ハン朝を興した。この結果、東トルキスタンの住民は、次第にテュルク化に向かい、カラ・ハン朝がイスラム教に改宗すると、イスラム化が進んだ。

## 6 参考文献

- ① 『世界の国旗図鑑』  
<http://www.sarago.co.jp/idxrgon.html>
- ② 『世界100カ国の旅 キルギス』  
<http://semaru.jp/kirugisu.htm>
- ③ 『在京キルギス大使館の開館』  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/16/etc\\_0422.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/16/etc_0422.html)
- ④ 『キルギス人と日本人 日コ同祖論』  
<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mkun/nazo/Kyrgyz.htm>
- ⑤ フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

- この“きび考”7号が皆様の手元に届く頃には、平成25年（2013）の新春を迎えられ、新しいスタートを歩んで居られることと存じます。寄稿を戴きました皆様には年末の多忙期に執筆戴き有り難うございました。
- 24年度の総会後の役員会（7月3日）で、若狭会長の役務休職の申し出があり、規約により残り任期を延原・丸谷両副会長に担当して戴きました。延原氏は備前焼作家の他に、備前市文化財保護委員に就任され、丸谷氏も年末には入退院が重なりました。現在は快方で体調の調整中と伺っています。
- 当会の探訪会は、2月中旬（10・11日のどちらか）に吉備高島説の第2弾として、岡山市四御神（しのごぜ）界隈を探索したいと考えています。案内は矢吹壽年氏で彼はこの地が「風水」の地として熱い想いをお持ちです。平安時代の式内社からの由来の土地でもあり、近くには備前車塚古墳（前期古墳で前方後方墳）に三角縁神獣鏡が13面も出土した「意味深」な場所です。  
参加希望者は事務局まで連絡下さい。後ほど企画書をお届けします。
- この会は特定の『説のみ』を対象にしている事は、平成23年度の総会で新しく「設立宣言」を併せ規約化しているところです。  
当会の有志三名で、『若狭哲六氏の研究に学ぶ』交流講座を24年8月26日から開催されています。毎月第2土曜日に開催されていますので、ご希望の方は高森氏（TEL・FAX＝086-255-6088）まで問い合わせ下さい。
- 次号の寄稿文をお待ちしています。 編者

## “きび”考

第7号 2012(平成24)年12月31日発行

発行 日本先史古代研究会

会長 若狭哲六 706-0022 岡山県備前市東片上 771

事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1 山崎泰二方

電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241

メール=senshi@bosaisystem.co.jp(事務局専用)

編集委員 井上秀男 延原勝志 樋口俊介 本松一郎 丸谷憲二

濱手英之 山崎泰二(事務局長兼編集委員長)